

安政南海地震の津波碑

安政元年11月5日(1854年12月24日)、前日の東海地震に引き続いて、紀伊半島沖を震源とする南海地震が起こり、四国の海岸は津波に襲われました。この時の津波碑が四国各地に建立されています。徳島県小松島市と高知県土佐市の例をご紹介します。

■豊浦神社の石碑(徳島県小松島市)

安政元年(1854)11月4日の朝方と夜に地震が起こり、5日夕方大地震が発生しました。5日午後5時半頃から小松島浦で火災が発生したため、近隣の者が総出で消火活動をしていたところ、津波の噂が出て消火に当たっていた人々が逃げたので、小松島浦の7割方が焼失しました。小松島浦に襲来した津波は川口で八方に広がり、沿岸の堤が60mも切れて今開、南開方面に塩水が流れ込んだものの、すぐ引いたので大きな被害を受けずにすみましたが、田野、旗山、金磯新田、和田津新田では大きな被害が出ました。赤石町の豊浦神社の津波碑には、安政地震の津波のため各地で多くの人が流されたが、豊浦や近くの人がこの神社に集まって難を逃れたのは白楽天(豊浦神社の祭神)のおかげと刻まれています。<小松島市新風土記編纂委員会編「小松島市新風土記」2001年など>



■宇佐萩谷の安政地震津波碑(高知県土佐市)

安政元年(1854)11月4日午前の大震災では宇佐に津波が7、8度押し寄せたものの人家まで来ませんでしたが、翌5日午後5時頃に発生した未曾有の大震災では山崩れ、人家倒壊が起こり、人々が救助を求めているところに大津波が襲来し、海に近い家は悉く捲き込まれました。宇佐では家屋がほとんど流失し、流死は70余人に及びました。宇佐萩谷の安政地震津波碑には、山手へ逃げ登った者は皆つつがなく、衣食等を調べたり、あわてて船に乗った者は流死を免れなかったと記され、後代の変に逢う人は必ず用意がなくても早く山の平らな傍に岩のないところを選んで逃げる事、流失の家財・衣服等を拾うと流行の悪病にかかることなどの教訓が刻まれています。<宇佐町保勝会編「宇佐町誌」1937年、土佐市史編集委員会編「土佐市史」1978年など>

